

③そのために学校側は、正常な話し合いが出来るよう誠意ある態度で臨まれることを要する。

(中略)

既に一九日未明には衝突寸前の状態までになり、さらに大学本部側より封鎖解除並びに中川会館内の教職員の見解解放を二〇日正午までに行なうようといった最後通告的な申し入れが行なわれて新たな段階を迎えた今、より一層、民青・全共闘間で武力行使が起る危険性が增大している。体育会員をはじめ全立命館の学生諸君は、両者の武力行使を阻止し、寮問題・議長選挙など現在学園が直面している諸問題に対して今後スムーズに対処できるようにするために、二〇日正午に存心館時計台前に集まられることを呼びかけます。

一月二〇日、寮連合の「八項目要求貫徹・臨時会開交要求」の集会所が開かれる一方で、大学当局と民青学友会は「封鎖解除一万人集会」を開き、議長、学部長、理事・教職員・生協労働等が出席した。

(ビラ)アピール

学思寮々委員会

現在我々の闘っている学寮革新闘争は、今やまさに現行の「立命館方式」を超える質を持つた闘いとしてある。

何故そうした形で激化するのかといえば、それは三十九年度諸事項の現在の機軸の中で語られねばならない。即ち、その意図するものは、教学に重点を置き、小集団教育を学生が主体的に担い、小集団プロット制を媒介としながら、新たな寮国主義の構築を志同するものであり、その意味において学寮は立命館教学のメルクマーとして位置付けられている。具体的にはマスプロ教育への傾斜に対する阻止め、つまり内在的批判の場としての学寮であり、自主的研究を可能とする小集団制の確立の場としての学寮である。このように学寮の位置付けは、まさに、現代の教育の歪みに対する内在的批判の意識を備えていた。しかしながら、これらの位置づけが現実のものとなるには非常に多くの困難が横たわっている。ここに、厚生の場としての学寮の側面が第一義的な教育を保障するものとして浮び上り、寮自治の問題も大きくクロスアップされてくる。厚生の側面が重要だというのは、入寮する学生の出身階層が相対的に貧困であるということに基本的に関わっているし、こうした相対的貧困階層の出身者が入寮を希望しながら全員入寮出来ないという現状に、当然新寮建設の要求を出さねばならない。

こうした現実の諸矛盾を、四年間の長い運動の総括と新寮建設のイメージをもって具体化したものが「八項目要求」である。

もはや沈黙の時は過ぎ、「民主立命」の解体と根底的変革に向けてあらゆる場所から闘いの声は挙がっている。あるいは最後とも言うべきこの機会に全ての大学人よ立ち上がれ！

クラスから、専攻から、ありとあらゆる場所から、議長・理事会との大衆団交を勝ち取れ！中川会館バリエードは「民主立命」に死をもたらし、立命館に真の自由を建設するために闘おうとする者の、心のシンボルとならねばならぬ。

ミネルヴァのフクロウは貴君に羽振く。

学友諸君、我々は闘争破壊を許さず、最後まで闘い抜くだろう！

八項目要求貫徹！

議長・理事会開交要求！

大学部長声明白紙撤回！

一月二〇日、大学当局は、戸木田・山手教授を中心として、封鎖解除のための「統一指導部」を設置する。寮連合の「大衆団交要求」を撤回した大学当局は、一二時から「封鎖解除一万人集会」なるものを開催し、寮連合と全共闘(軍)の集会に反対する。この集会には末川博議長が出席し、「封鎖を解いて話し合いを云々」と訴えた。しかしながら、三月に任期を終えんとする七六衆のリベラリストは、既に学内の実権を武蔵氏(当時経済学部委員長)に奪われていたものであり、寮連合のバリエード封鎖に至った過程を隠蔽できていない。さらには二二日に起る日共民青のゲバルトに備えても、「そんなことは知らなかった。が、とにかく民主的に事象の解決を云々」と、後の全共闘と議長・理事会開交の席で告白しているように、武蔵・戸木田・代々木ラインの手によって、彼の地位・名声を利用しての大衆操作の具としてしか存在していなかったのである。のちに、末川氏は、寮連合委員長との会見で、紛争に理解を示し代々木非難をおこなったといわれる。

その日、おそらくは、立命館大学の歴史は止まって以来の、一万人をこえる大学人が、狭い広小路キャンパスを互いの余地を全く残さず、立ちつくし、正門前の広小路通りにあふれ、存心館の各階の南側の全ゆるぎは人であふれた。一万人集会は一、寮連合、全共闘(軍)が占拠する中川会館に背をむけて演説をつくり、寮連合参加者が中川会館正門バリエードに反対するようにして行なわれた。集会は短時間で終わり、秘密のうちに合意されていた五者共同と理事会の行動内容は、それが重大な影響を及ぼすものであるにもかかわらず、全学的な、八千人をこえる集会参加者によって意志一致されたことになる。およそ二〇〇〇人の民青行動隊は、素手でバリエードにせまり、守るため、ヘルメット、ゲバ隊で阻止線をはる実力部隊に接触した。接近戦で、長いゲバ隊は役に立たず、ヘルメットをうばわれるような状況になり、阻止線は後退していった。占拠の解除を支持する数千の学生が、民青行動隊に後援し、こうした人の波で、百人をこえるていどの阻止線は押され、さがる一方だった。占拠解除隊が中川会館バリエードに手をつけはじめたとき、寮連合・全共闘は、陣列をととのえて突進をはじめた。この大規模な流血の始まるかいなかの時点で、正門左に位置する守衛室の屋根にのぼった乾教学生徒らが、キャンパスへむかって呼びかけはじめた。

-19-

共同声明の趣旨(後援)は、一八日集会にさいしての乾教学生部長ら団交継続グループの表明と一致するが、事象の経緯にさいし、バリエードに目を奪われた実力解決路線をきびしく批判する各教員の発言は、事態の表層ではなく本質へふれようとする態度において、あまいな一万人集会を瓦解させるものであった。キャンパスの行動は止まり、人々は静謐し、乾教学生部長らの理事会に対する回答の要求・相互討論による理解のアピールに注目した。乾教議長が、「我々に何の連絡もなく、事をかまへ、事態の解決のために、当事者の寮連合、学寮委員会をつんばさじにしたい理事会の非」を一つ一つ指摘するたびに、意に屈倒され消沈していた寮連合、全共闘(軍)支持の学友は、熱い拍手でこたえた。「一万人集会」演壇のマイクを握る山手教授は、いつもの冷静な態度とはちがって、あわてふためいて部隊を後退させ、集会所を研心館四階の大教室にうつした。乾教授の呼びかけを無視した大学理事会のこうした対応は、「一万人集会」参加者のかなりの部分に失望をあたらえ、八千人のエネルギーは、空中分解し、封鎖解除の行動をしりすばみに中絶させる。それは、もとと「一万人集会」の設定に原因がある。理事会の、政治主義・力学主義、技術主義の低態な展開に比して、問題のありかを捉え、深遠の意識を説くしていく人々を、次に引用する資料でみれる。

(資料)

(秘)

民青五者共同より、二〇日午前一時三〇分頃、本部会議に次のような申し入れがあった。